粗挽きウインナー

ごはんライス

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
粗挽きウインナー

【Ｎコード】
Ｎ８７０１Ｓ

【作者名】
ごはんライス

【あらすじ】
２０００字と決めて書きました。大輔華子先生をモデルとした少女が出てきます。

さて何から語ろうか。小説だから語らねばならぬ。
まずは、主人公を紹介しよう。
主人公の名前は、豆沼現一。中学二年生である。
現一は、確かに悩みを抱えていた。現一の彼女、華子のことである。
華子は同級生である。現一は華子に告白され、けっこうかわいい顔をしてるので気軽にオッケーしたのが間違いの始まり。
華子はとてつもなく変な女だった。
「現ちゃん。華子、今日現ちゃんの家に行ってもいい？」
「いいけど」
「やったー」
華子はお泊まりセットを持って家に来た。
「あの華子。そのう」
「華子。今日、現ちゃんと一緒に寝るんだ」
現一の母親も困惑してる。
「華ちゃん。中学生でそれはちょっと早くない？　今日はお帰り」
「やだ。やだ。華子、今日泊まるもん！」
まるで小学生である。ちなみに華子の母親はトラックの運転手をしているので、夜家にいないことが多い。
「困ったわねえ。華ちゃん、エッチなことはしちゃダメよ」
「はーい」
「現一もだよ」
「うぬぬぬぬ」
現一はセックスがしたくてしたくてたまらないお年頃である。自信がない。狼が人間の皮を被った状態。それが中学生というものだ。
現一は、部屋で華子と、映画雑誌を眺めていた。
風呂上がりの華子のいい匂いがしてむらむらする。

「現ちゃん。ゴールデンウィークに映画観に行こうよ」
「い、いいけど」
現一は映画などどうでもよく、ちんこギンギンである。華子は全然気づかず、現一の近くに寄る。
現一は頭の中で竹刀をぶんぶん振った。
なんくるないさ！　なんくるないさ！　なんくるないさ！
現一はとほほほほな気分。まったくもって情けない。
さてもう寝るかという段。現一は床に布団を敷き始めた。華子が何してるのと不思議そうな顔をしてる。
「ベッドあるじゃん」
「ベッドは華子が寝るじゃん」
「一緒に寝ようよ」
「え」
現一はどきまぎしてしまう。
「エッチなことしなきゃいいじゃん」
「はあ」
その夜、華子の体温が気になって気になって、現一は一睡もできなかった。
華子の変なエピソードはまだまだある。
ある日、華子と現一は、休日に、街へショッピングに出かけた。
そこで、ストリートミュージシャンを発見した。ギター片手に熱唱している。
「わあ。すごい。現ちゃん。おカネ入れてあげようよ」
「やだよ。オレあまりこの歌好きじゃないもん」
「んもう。めちゃいい曲なのに」
華子は、リズムをとりながら聴き入ってる。
「あたしも歌いたくなってきちゃった」
「え」
華子がストリートミュージシャンに合わせて歌い始める。
「こ、こら華子。やめんさい」

「ラララー粗挽きウインナーがーラララー」
ストリートミュージシャンもわたふたして、ギターの音色がおかしい。
「華子。華子。どうどう」
ついには華子が踊り始めた。両手を天につきだして、腰を振る。
「ラララー粗挽きウインナーがラララー」
「華子。やめて。お願い。やめて」
通行人が面白がって、群がってくる。そして、写真を撮ったり、おカネを投げたりしてる。
現一は、もうどうしていいやらわけわかんない。
「現ちゃんも踊りなよほら。ラララー」
「んもう！」
現一は仕方ないので華子の真似して、両手を天に突き上げ腰を振るが、乗り気じゃないので動きがぎこちない。
というより恥ずかしくて恥ずかしくてたまらない。華子は全然気にせず踊ってるし、ストリートミュージシャンも客が増えたのでノッている。
現一は、もう華子と別れようかなと思う。顔はかわいいけど、性格が変すぎる。
現一は華子を屋上に呼んだ。
夕日を前に現一と華子のシルエット。カラスがかあかあ鳴いているのをＢＧＭに。
「現ちゃん。話ってなあに」
「あのな。華子。単刀直入に言うよ。オレと別れてくれ」
「え」
「オレと別れてくれ」
現一は華子が泣くかなと思った。
しかし、華子は泣かなかった。
その代わり、制服を脱いで、腹を出し、どこから用意したのか短刀を手に持って「切腹する！」とわめく。

「こ、こら。何しとるんじゃ。侍か。やめろやめろ」
「現ちゃんが別れるなら、華子、腹切る！」
「んもう。むちゃくちゃだなあ」
「じゃあ、別れるのやめてくれる？」
「いや、別れるのはやめないけど」
「じゃあ腹切る！」
現一は困ってしまう。変は変だけど、ここまで変とは想定外だ。切腹なんて誰も予想しないよそりゃ。
「ふん。じゃあ勝手にすれば」
現一は突き放した。オレが甘いから華子が調子に乗るんだと思ったので、突き放した。
「もう腹切る！」
「あっ」
華子の腹から、血がぷしゅーーーーーと噴き上がった。
「ううう」
「は、華！！」
華子が床に倒れる。現一は華子を抱える。
「華子！　華子！　しっかりしろ！」
「現ちゃん、あたし……」
「しゃべるな。別れるなんて言って悪かったよ。生き返ってくれ」
「本当？」
「本当だとも。だから。だから」
華子は、けろっとして飛び上がり、正座した。
「あ、ありゃ？？？？？」
「この血、絵の具を溶かしたやつだよ」
「え」
現一はあわてて、短刀を手に取ると、ぐにゃっと曲がる。ゴム製だ。
「！！！！！！！！！！！！！！」
華子はげらげら笑ってる。

ちきしょう！　屈辱的だ！！！！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8701s/

粗挽きウインナー

2011年4月30日20時10分発行